七　柏尾戦争記

〔解説〕この記録は、勝沼町ゆかりの柏尾の戦争に関するもので、水上文渕著「柏尾戦争」と、結城礼一郎述「柏尾の戦」の二編を採録した。ともに活字になつて広く愛読されていたといえるものではなく、町内でも初めて読まれる方も多いと思われる。二編ともに慶応四年の柏尾の戦いの経緯を興味深い描写によつて綴つている。

明治元年　柏尾戦争

全　水上文淵著

緒言

峡中に於ける維新前後の大事件は、即ち天保時代の郡内騒動、明治初年の柏尾戦争、維新後の大小切事件とす。是等事件の顚末を調査せしものありや、余本年八月休暇中先つ柏尾戦争の顚末を明にせんとし、古老に聞き地方に問ひ、而して之を接続すれは空間を生す。偶々鹿島淑男氏の著に係る近藤勇の伝記を見るに、中に柏尾戦争の記事あり。依て之を主として中に見聞の事実を挿み以て柏尾戦争の一編とせるなり。

而して郡内騒動は、小沢政常なる人の記述せしものを嘗て竜王村経師屋より得たるが顚末明了なるを以て之は譲り、大小切事件は明治五年八月廿三日にして、其大略は恵林寺境内に建てる小沢島田二氏の碑文に明なるも、当時万力、栗原、大石和小石和二百有余村の百姓鐘太鼓を打つて勢揃をなし、甲府目掛けて押寄せたる事件にして、後日其顚末を明にせんとす。

先は調査の次第と将来の期待とを記して緒言となすもの也。

大正十一年八月廿五日　近年稀なる暑気を冒しつつ

北窓下に記す
御手洗庵文渕印

甲州鎮撫隊の顚末

有栖川宮を征討総督に戴ける薩長の官兵、東海東山の両道を押して江戸進撃の途にありとの注進頻りに至るや、江戸城内にては重臣等の評議日々に開かれ、明治元年二月五日、慶喜公には江戸城を出てられ上野寛永寺に蟄居し、恭順の意を表され、山内の警衛を仰付けられたる新選組は日夜厳重に警衛せり。然るに官軍江戸進撃の報致るや、新選組隊長近藤勇は慶喜公に向つて甲州鎮撫を願出で、此月廿八日許可ありて軍用金五千両、大砲二門、小銃五百挺を下附せらる。

勇は甲州城の委任を願出した真意は、江戸城はどふならうとも自分は甲州城の堅要を孤守して飽くまで官軍に抗しようとするにあつた。

其心は慶喜公にも察せざるにあらざるも恭順の誠意を表する上に於て妨になるのは新選隊である。勝海舟等も此の爆烈弾のような危険人物を慶喜公に近けて置くは将来のため宜しくあるまいと考へて、傍からも言葉を添へて願意聞済になつたのである。言ひ換へれば敬遠主義を採つたのである。

此時各道に発向した官軍の配置は、

東海道の先鋒は橋本実梁、柳原前光両帥に海江田武治、木梨粘一郎附添ひ、

東山道の先鋒は岩倉具定、具綱の兄弟を大将として板垣退助、伊地知正治附添ひ、

北陸道の先鋒は高倉三位を総督に四条隆平卿副督となり品川弥二郎、黒田清隆附添ひ、

而して総の司令としては有栖川宮殿にして西郷隆盛之か参謀となり、二月廿三日を以て全軍出発督府の大旆は駿府に進められたり。

新選組は三月朔日に江戸を立ち、名は甲州鎮撫であるが、其実は甲府城を占領し東海の官軍を玆に喰止めようとするのである。

新選組の隊長は近藤勇、副長土方歳三、副長助勤沖田総司、同長倉新八、原田左馬之助、斉藤一、尾形俊太郎、調役大石鍬二郎、川村隼人等十七人なり。

其夜は新宿泊り、翌日は甲州街道を行進して府中宿なる土方歳三の兄土方良順方を宿として盃を挙げ、翌日は露宿、其翌日は日野宿なる佐藤彦五郎方を宿とせり、此佐藤彦五郎と云ふは、剣を近藤周高勇の義父に学ひ勇とは同門の誼も深く、家は代々日野の名主を勤め聞へたる旧家なり。今回の甲州鎮撫にも前以て内相談があり、佐藤は豫め春日隊と云ふを編成して一切の兵糧方を請負ふこととなり、其準備も成して勇の到着を待ち居たのであつた。さて佐藤彦五郎の率ゆる春日隊は、翌朝鎮撫隊に附随して日野を出発し、近郷近在の壮丁も召集ありと聞て奮つて隊に加はりしもの百人と数へられ、何れも勇と生死を共にするの決心固く、佐藤家の庭に勢揃を為し水盃の勇しき門途を為せり。

八王子に一泊し、翌日は猿橋駅に入つた。然るに宿役人の報告を聞けば、官軍は既に下諏訪に着し、甲州に入るも一両日中との事である。勇は此報告に接して我先んするか、彼先んするか、一日一刻の遅速か一隊運命の岐るゝ所であると、急に馬の徴収を命し漸くにして七十頭を集めた。勇は直ちに之を以て騎馬隊を造り、疾風を切つて甲州街道を疾駆した。

東山道の官軍は三月一日諏訪に着いた時は、諏訪の城主諏訪因幡守は御老中となつて江戸に詰められて居つた。子息昌之助が降参に出たので、難なく諏訪は官軍の手に落ちた。そこで城中に於て軍評に及んだが、此時は因州長州の斥候隊は既に碓氷峠迄繰込んだ時とて、各々功名手柄の争ひに花も咲いたが、結局甲州街道が肝要であるといふ事になり早速甲州に兵を進める事に軍議一決した。

甲州は武田氏の起りし武の国で、人気は強し糧食は多し、殊に甲府勤番として数百人の兵士が居る。其勤番支配といふのが、高は三千石、御役知が千石、都合四千石以上の者が二人あつて、山の手勤番と追手勤番とに分れて居る。当時山の手ハ佐藤駿河守、追手は太田筑前守が支配役で、山の手組頭が斉田佐右衛門、阪部量兵衛の両人、追手組頭が鳥井敬之丞、柴田監物の両人、其他に藩士百人宛、両方併せて弐百人、他に与力か十人、同心五十人つゝヲ合せて与力弐十人同心百人総計三百二十余人、仲間お側を入るれば五百人からの人数がある。其上に甲府陣屋の御代官中山精一郎、甲府町奉行若菜三男三郎等の組下も亦少くない。これに幕軍が乗込んて組するとすれば客易ならさることである。何んでも先んじて甲州を手に入れねばならぬと、偵察を放ちて甲府の状況を窺はしめた。偵察復命には甲府は飽まで官軍に反抗の態度を採りゝ近々入城せんとする幕軍を待合はして一合戦の準備中であるとの報告である。

其内甲府は一手勤番となり、太田筑前守は江戸へ引取り、佐藤駿河守一人となつたが、其佐藤も臆病者にて妻子眷族を引連れ大菩薩峠を越へて江戸へ引上けた。今や甲府城は柴田監物が事実の大将分で、柴田庫太郎、保々忠太郎、疋田喜一郎、加藤弥正、磯部物外、平山陣平、小野順之助、同子息清三郎、豊田庄兵衛等が協力一致して、日々教武場へ集合し会議を凝らし、甲府西場に在る荒川を前に控へ花々しき一戦を交へようと志して居る。

官軍も軽率には打入らないので、先づ察偵として土州の黒岩治部之助を入り込ませた。黒岩は会津言葉が出来るので会津藩士と偽り、柴田監物の家に入り込だ。柴田も気をゆるして実子と黒岩と相談して居つた。官軍の察偵黒岩治部之助が、甲府の主戦党の頭柴田監物の帷帳に参して居るから、城内の機密はかなりに官軍に知れて居る。此間ニ抜駆けの功名をしようとの山気を起して官軍に先んじて甲府に乗込みたる一仙である。一仙は甲府相生町に居つて彫刻を為し居りしが、某といふ公卿の二男にして放蕩に身を持崩し放浪して歩て居たものを説付て、其二男を高松皇太皇后亮と名乗らせ、自分は小沢雅楽之助と仮名し、密に京都を立ち甲府に入り、京都より参向の勅使と詐り柳町二丁目の本陣に宿を取つた。さて一仙の雅楽之助は、かつて縁故なる勤番の小野寺某を抱き込み、手を濡らさずして甲府を乗取

り官軍の鼻を明して功を一手に収めようと計つた。太田町に山十といふ饅頭屋がおつて、城内に好い得意場を有つて居るのでこの主人をも味方とし、漸く計略を進めて居たが、彼の黒岩治部之助はこの勅使に不審を抱き、密に内偵の結果其贋勅使たることを見破つた。早速柴田監物に告げて彼一党を取押へようとしたが、小野寺の内報に贋勅使高松皇太皇后亮は甲府を夜逃して勝沼まで落ち延びたが、行通途絶のため止むなく引返して諏訪口へ出た処を押へられたが、本人は看板にされただけで罪はないと分り、黒岩の保護で京都へ送り返へされたが、主謀者の一仙は捕縛の上、里垣村の山崎に於て梟首せられ、饅頭屋の山十は町奉行所へ引立てられ、若菜三男三郎の判決で新町河原荒川橋の側にて斬首に処せられた。小野寺某は録高を減せられこれで一件落着に及んだが、密偵の黒岩も姿を消し、東海道の総督府一手の大将分と早変りしたには驚かされた。甲府では近藤勇等の鎮撫隊の到着を待て戦をしようと、其迄ぢつと落着て甲府城を持応へようといふ事になり、其到着を一日千秋の思ひで待つたが、官軍は攻撃の手筈整い、総軍二手に分れ本隊は薩長大垣兵を以て碓氷峠を越へて江戸口に向ふこととなり、一隊は西尾遠江守が監督となり、諏訪の一小隊が先道に立ちて本街道を甲府へ向つて出発する。因州兵の一小隊と肥前の一両小隊は斥候の任務を負ひ、因州は唯(只)九十九が之を率ひ、肥前は秋津清吉が隊長となり三月二日七ツ下りに上諏訪を発した。

因州肥前の両斥候が蔦木に着た其夜、甲府代官中山精一郎の部下川上繁之助といふが三名の従者を引連れて談判に向つた。両隊の将只九十九、秋津清吉がこれを引見してこれが使者の要旨を聞くに、甲府は主戦と開城との両派に分れて居るが、征伐を用ひずして事は困難に納るであらふ。それに官軍が正面から攻寄せたならば開城派まで主戦派となり、心にもならさる戦争とならぬとも限らぬ。斯くては折角平和に終らせんとする甲府市民の希望を破壊するものであらう。それ故暫らく進軍を見合せて貰ひたいといふ口上である。二将は之を聞て、此使者が正使であるか、それとも曖昧であるか、この使者が不謹慎なり誠意を缺て居るように見へるので、或は彼の策略ではあるまいかとも疑はれ、高遠の千屋新左衛門、大村の日地虎作なども内議の上、兎に角従者三名を蔦木に留置き、川上一人のみを軍後に従へ、三日早朝、別役成戦外四五人を斥候として韮崎に向はしめ、使者の帰りが遅いので中山精一郎と村松繁一郎の両人が自身韮崎まで出向て来て居た。夜に入つて只と秋津の二将と正式の会見あり、甲府開城の一日も速ならん事を先方に促かした。尚只九十九は大村藩の美正貫一郎、平井直次郎、高入覓次郎等を先手として甲府に入らしめ、府内の実情を探らしめた処、府内の議論は事実に二派に分れて居るが、其勢力は開城派が勝て居る。主戦派は柴田監物が煽動する処である。それに会津や江戸の脱走兵が多数入込んで居るから、突嗟に城の受渡しを済ませねば何時変事が起らうも知れぬとの報告であつた。それでは斥候隊だけでも先に危険を冒して入城しようといふ事になつた時、東海道の総督府から、彼の黒岩治部之助が来て板垣退助の本陣を訪ひ、総督府の内命を伝ふる所となり、甲府の受取方城代への交渉は総て黒岩が其衝に当る事となつて単身甲府へ入つた。明れは三月四日の早朝、官軍は韮崎に勢揃して府中へ入つた。斥候隊が逸早く城受取の手続を了つてしまつた。柴田監物等の一派は全く計略齟齬し、もう手の出しようもなくなつた。三月五日公式の城受取を行ひ、組頭高田佐衛門、目附根岸好太郎より甲府城一切を官軍江引渡した。然るに官軍は尚油断なく城中ニ入りたるも万一の警戒を加へた。それは城内に地雷火が伏せてあるとの凡説もあつたからである。そこで官軍は一計を案出し、城下へ布令を出して「今日に限り百姓町人に限らす城内の見物随意たるべし」と、何かさて何百年来見たこともない城内の見物が出来るといふので城下の百姓町人我も我もと押込んだ。これは地雷火を踏ませるためであつた。知らぬ事とは云へこの危険な犠牲にさらされた城下のものは、城内残る隅なく見物して満足に引取つた。官軍は尚それでも安心出来ず、次には諏訪藩を犠牲に供して城検分のお先手を勤めた。其名目は諏訪藩に花を持たしたやうに聞へるが、其実これも城内の地雷火踏の役を命せられたもので、その惨酷な意味のお先手を勤めさせられた者の中には、渡辺千秋、渡辺国民、天野糸平、千野兵庫等があつた。

鎮撫隊の先発七十騎が轡を並べて猿橋を出発し、甲州街道を疾駆しつゝあつた時、既に甲府城は官軍に引渡されてしまつた。若し勇等が官軍より先に甲府に入つたならば、城内の勤番は自然これに組し籠城と決したに相違ない。そうなれば官軍もこれを陥落する迄には多少の時日を費し、幾回の苦戦を経たことであらう。此一孤城を以て天下の大勢を支へる事は、到底不可能のことであつたらふが、各道の官軍も直接間接に前進を妨げられ、江戸城の明け渡しも彼のように円満には納らなかつたらう。勇の鎮撫隊が一日の発旅を遅れたのは、官軍に取つては非常の幸福であつた。さて此の先手は四日漸く駒飼に着した。勇はまだ甲府が官軍の手に落ちたのを知らぬのである。総員を点検すると馬丁を合せて僅に百二十一人、此小人数では迚も甲府へ入ることは成らぬ。後隊を待合せなければならぬのであるが、後れたと見えて其日中ニ追ひ付くやら分らぬ。尤も谷村と河口宿には会津藩の梶原監物、日野本之亟の両人が取締となり、高取、立川主税等これに従い、鎮撫隊の到着を待ち合わせて甲府に入るべく、何時でも打て出てるよう準備はして居る。

然るに勇は此処まで来て甲府の様子が分つた。一日の違ひで官軍に先んじられたと聞き、足摺して悔んだがもう後の祭である。もう此上は仕方がない。此辺で官軍を迎へ打ち、せめてもの鬱憤を晴さうと滞陣の用意し、谷村の斉藤の許にも使を出して打合せをした。又野戦となつて現在の兵では不足である、是非とも加勢を求めねばなるまいと、直ちに土方歳三をして横浜神奈川の守備たる菜葉隊を迎への為め、早駕を以て東に急行せした。此菜葉隊と称するは、横浜、神奈川を固めて居た旗下の一隊で、揃ひの青羽織を着て居たからこの綽名を附けられたのである。其内羽織の紐に赤と紫とあつて、何れも一大隊八百人つゝ合せて一千六百人ある。この隊は豫め勇と連絡があつて、鎮撫隊とは二日後れの五日は同所を出発し、後隊として甲府に入る手筈になつて居た。然るに斯る齟齬を来して火急の加勢を要する事となつたので、土方を迎へに行かしたのである。土方を立たしめて後、勇は川崎順道、其他十人ばかりを従へ、鶴瀬の亀助といふを案内に立てゝ自ら地形を偵察し、等々力に来つて杉の御坊の南に関門を設け、土地の鍵屋孫兵衛をして厳重に護らしめた。鎮撫隊の大砲方たる結城無二三は、勇の命を受けて岩崎勝沼に触れを廻はして、一戸二把つゝの薪を出させ、同夜徹夜篝火を焚けと厳命した。且つ下青野村附近の各村名主を呼び出して、これを説て味方に附け、更に勝沼の阪上にも関門を据へ野戦の準備に怠りなかつた。

官軍邀撃の軍備は整ふたが、それとても急場の事であるから、一月も二月も支へるといふことは不可能である。どうしても目的の甲府城を乗取り、これに拠るの外は無い。勇は一書を裁して甲府の町奉行若菜三男三郎へ密に持せてやつた。其文面には、

我等此度甲府取締を命せられ鎮撫隊として罷越たる処、官軍既に入城の報に接す。我々突然突込みては却て官軍に不敬に当るへく、且つ我々より官軍に抗する処存は毛頭なくに付、貴殿の御取計を以て暫らく進軍を差留る様官軍の大将へ申出てられ度、我等近郷を鎮撫して追て甲府へ参るへく候右者急申入也

といふのであつた。若菜とても内心は官軍に易々と城を取られたのをくやしく思つて居る処だつたので、勇の鎮撫隊を城内に引入れたいものと其方法を考へたが、官軍の警戒が厳重なので目的を達せられそうもない。其内此密書が来た事を覚られて直ちに官軍の手に取上けられてしまつた。もうこうなつては策の施しようもない。鎮撫隊に互に心を寄せて居つた城内の徒も泣寝入するの止むなきに至つた。

城内の裏切も望なしと失望した勇は、然らば敗る迄も此処を最後に合戦を試みようと手配をした。土方が連に行つた彼の菜葉隊も、同日明日の一日には間に合はぬ。勇は岩崎の方から鶴瀬の各村に人を出して義勇兵を募らしめた。頼むと云はれたら是か非でも後へは引かぬ甲州気質、忽ち募に応する村々の壮丁数十人に達した。其壮丁頭には雨宮次郎吉、同徳右衛門、岩崎の長次郎、同清蔵、同源十、留五郎など何れも命知らずの究竟の壮丁

である。勇も其武勇なる応募兵の意気を嬉しく感じ、上記六人の者へ銘々金拾両に左の折紙を与へた。

一徳川家御為に尽力致し候輩は御挽回の際恩賞致可き者也

大久保剛昌宣

然るに六名の壮丁頭は、「私等は金で命は売らぬ頼むと言はれた一言に此身躰に慰斗を附けたのだ、然し折角の事だから書付文は貰つて置くが、金は返へす」と突き返したのを漸くにして無理に納めさせた。此応募の壮丁中には後世の財界の快傑雨宮敬二郎も加つて居た。

鎮撫隊は新たに募に応じた此五十余人の壮者を得て、大に意を強ふした。此上は土方が迎に行つた菜葉隊の来着を待たずとも、何時でも合戦は成ると各要害防備の部署を固めて、官軍の迫るを待受けて居た。

官軍方も亦鎮撫隊の勢を聞て、要害に根を据へぬ内に討払はねば事面倒と思つたが、不知案内の地ではあり、敵勢の多寡も分らぬので迂濶には攻めよせられぬと思つたので、先づ敵状偵察として土藩の武市久吉を敵地に入れた。武市は豪勇の士であつたから、単身山駕に乗て先づ本街道を偵察し、路は山地に入つて山中の村々に屯集せる敵情を仔細に探つて、勝沼の関門に差しかかつた。此処は勇が自ら地理を見立て設けたる関門であつたから、備も厳重であつた。武市は平気で駕の侭通り抜けようとすると、守備兵に誰何せられた。然も落ち着き払つて「掘者は会津藩士何之某谷村の梶原に用向あつて罷り通る」と云ひ、駕を急がせ其宿の本陣に悠然と泊り込んだ。其態度が余りに落着て居たので、関門の守備兵もまさかに官軍の偵察であらうとは気附かず浮か〳〵見逃してしまつた。

さて武市は殊さら本陣に宿して敵の疑を避けて、其夜密に宿の主人を呼び出して事情を明し、敵情を聞て夜に紛れて敵地を脱し、本隊に報告の任務を遂けたり、此胆勇の士武市久吉は、後岩倉右大臣を狙撃した巨魁で悲愴なる刑死を遂げた人である。

明くれば三月六日、戦闘準備成りたる鎮撫隊は、鶴瀬にて隊を二つに分け、一手は川沿に南に渡り、岩崎谷の山腹に出で、こゝに陣を据へた。一手は土方歳三の代理として佐藤彦五郎の春日隊、其勢僅か四十人教導口に拠つた。勇の率ゆる本隊は柏尾山の東神願沢を前に控へ、大砲二門を据へて要害堅固に陣勢を張つた。

柏尾の攻撃

土州の武市久吉が冒険なる偵察に因つて敵情を偵察せしが、只不審なるは其人数が余りに少数なる一事である。或は少数と見せ掛けて甲府城内の勤番士が内から起り内外呼応して城の乗取り策を廻らして居るのではあるまいかと、官軍では要心に要心を加へて大部は城を守る事に定め、只因州の三小隊と諏訪の二小隊、土州の二小隊のみを出す事になり、即日甲府を出て石和へ繰り出した。

武市久吉は別役成義と共に再ひ偵察に出で、城東山崎まで行くと、勝沼の空に当りて天を焦す松明の光、何さま多人数の押寄せ来まじき気勢なるに、直ちに引返して本隊を固め、何時寄せるかと待つたが其事もなく夜があけた。是は結城無二三が近藤勇に建策して、此夜一手の兵を岩崎辺より市川附近に忍ばせ、甲府の西南より火を放ち其混雑に紛れて甲府に入り込み、急に起つて一挙に城を乗取らふと云ふ奇策であつた。若し其策が行はるれば、城内勤番の士にも裏切者を出すべく、地の利を知らぬ官軍の狼狽に乗じて攻め討つたならば、或は奇勝を得たかも知れぬ。然るに事行ふに至らずして短夜の明けたのは官軍に取つては天佑であつた。

夜明を待ちかねて官軍は石和を進軍し、栗原迄進むと、宿役人が注進して云ふには、今近田勇平といふ人が四五人の従者を従へて騎馬にて来り、今に官軍が此処へ到着する筈であるが、其節は自分の姓名を通じて隊長と会見を遂げたい、当方からも等々力まで出張するから、官軍の隊長も何卒四五人で同所迄御苦労を煩はしたいと斯様に申せと伝言がござりましたと言つた。何故に会見を申込んだのか分らぬが、或は和順を望むのではあるまいかとも考へられたので、兎ニ角斥候を出して等々力を探らせたが、募兵の影もなく見えぬ。尚進んで勝沼に入ると、戸毎に松明を焚た跡があり、敵兵の引払つた後であつた。

これ敵が我を狐疑せしむる一時の詐言であつたと分つた。此近田勇平と名乗つた騎馬の士は其実近藤勇であつたのだ。勇は自ら斥候に出た序に、この様な狂言を画て、官軍の進軍を少時にても暇取らせようとしたのである。而して自分は東柏尾山に引上げ此に死戦を覚悟するつもりで、塁を設け砲台を築て要害堅固に備へて居た。

官軍も敵の情勢を偵察し、これに対する一般方略を定めた。先づ正面には谷守部（干城）が隊長、山地忠七（独眼竜将軍）が副長となりて、土州、因州の兵五百人を率ゐて攻めよせれば、南方よりは諏訪兵が天下の糸平を嚮導にして日川を渉りて一気に寄せる。土州の谷神兵の一手は、菱山口より初鹿野を目指して北方山中を押登る軍略である。

此戦ひは、固より官軍の三小隊と鎮撫隊の小勢との小衝突に過ぎなかつたが、山中の厳石を攀ぢ樹間を縫ひなどして、一騎打の戦を試みたものもあつてか恰も源平時代の合戦を見るの感があつた。

当日の戦場は、先づ岩崎山に開けた春日隊の野村隼人といふが、抜駆の功名せんと、単独陣列を離れて山坂を下つて行くと、土州の偵察某と出会ひ直く組打となつたが、双方劣らぬ強力とて、上になり下になり押合捻合ひ、暫時勝負も附かなかつたが、これが山の中腹での出来事であつたから、山上山下の敵味方から好い見物となる、其内双方は力足踏み辷らして組た侭転々として谷底に墜落する、それを助けようと春日隊から中村半兵衛、谷巳之助、五十嵐藤助等が駆け出す、茲に彼我の衝突を起して入乱れての白兵戦を現出した。

此時春日隊の白石五六郎と云が、三尺余りの大刀を振かざして片岡勢の中に割つて入り、敵を六人迄斬倒したのは目覚しい働き振であつた。この一人のために斬伏られ、官軍は大いに乱れたが、斯くと見るより其二番隊の小笠原講吉、彼の敵を狙ひ打てと命する所が距離が近いので白石の耳に入つた。彼れはそれと見て足早に馳せ近づき、「鉄砲で狙ひ打てとは卑怯千万、いざ一騎打の勝負せん」と挑みかゝれば、彼方も望む所と一刀を抜て相対した。刀を交ゆること五六合、小笠原は受太刀となり、既に危く見えたので、土州に名を得たる一刀流の剣客今井利介が見兼て馳け寄り、白石の脊後より一刀を浴せかけた。不意を打たれて、何を小癪なと白石が振向く処を、小笠原は得たりと踏込んで一刀両断と打下した、さしも剛勇の白石も前後の挟打に逢ふて、美事なる戦死を遂げた。

話かはつて官軍は、勝沼出張軍の炊出しを下矢作雨宮広光宅に当てた。広光方にては快よく承認、当時酒造を営んで居たので、白米は上々のものを命のまゝに倉から持出し之を山と積んだ。官軍は引連れ来りし従者共を使ふて米を洗ひ飯を握り飯となし一個に一つゞつの梅の実を入れ、之を大八車に積み、人足を雇ふて勝沼に運搬せり。当時今の近藤智雄老、頼まれて運搬人となり勝沼を通り抜け柏尾に到り之を官軍に渡せしに、官軍は血のしたたる首級を前に置き、之を囲んで喫せしが見るも戦慄の思いなりしと。

弥々戦は始まれり、土州勢は一団となつて攻寄る。春日隊は佐藤彦五郎先に立つて衆を励まし、「此様の名を辱しめた百姓勢と悔られては一代の不覚ぞ」と呼はりつゝ茲を先途と防いだが、何時の間にか諏訪勢が岩崎山へ押上りて、山上より下を目掛けて打下す鉄砲に射すくめられ、春日隊はいかに死力を尽しても陣地を持ちこたへられず、散々になつて本陣に引揚げた。

同隊の池田七三郎といふ剛のものは、途に迷ふて岩崎谷の狐原まで落ちたが、官軍に追跡され、今は逃れぬ所と覚悟して十一人の官軍兵を相手に刀の折れるまで奮闘し、遂に討死を遂げた。岩崎山を占領したる諏訪勢は、山腹より柏尾山の勇の本陣に向つて発砲する。勇の本隊は悪戦苦闘に陥つた。

彼我の乱戦奮撃

勇が此日の策戦は、二門の大砲を、一門は南に向けて岩崎山の寄手に散弾を打掛け、一門は西へ向けて街道の因州勢を榴弾に打崩し、抜刀隊は其烟の下より面を振らず切つて入る軍配であつた。然るに砲手の誤りより、大砲の弾を取違へ南へ向つては榴弾を打ち、西に向つては散弾を撃つた。

殊にあわてたるか榴弾のボイス（火口）を切らず、無暗矢鱈に打つたのであるから、烟花の黒玉のやうに更に爆発せず、何等の効力もなかつた。

然し西へ向つて打つたのは、烟が寄手の方に吹き附け地の利を得たる所から、一発打てば烟に乗して突戦し大に便宜を得たるも、午後から風向が変つてきて東に吹き附けたので、官軍は大に力を得、守勢は攻勢に変つて猛然と突進した。岩崎山の春日隊が陣地を棄てゝ本隊に合したのは抑々の敗因である。

因州勢の陣頭には、天野祐治真先に立ち声をからして衆を下知して居たが、これに励まされて木村伊介武則といふ鉄砲の名手、狙ひては打ち狙ふては打ち、目立つ敵を狙ひ打ちの技術の精巧なる殆んど百発百中である。

只一人の木村に打竦められたる敵方より芝田一郎といふ若者、向山平の高見によじ登り大音に呼でいふよふ、「天晴なる貴所の腕前拙者は会津の芝田一郎なり、相手に取つて不足なし、いざ双方より狙打ちの勝負を決すべし」と言へば、木村は望む所と遥に応へて銃を構へ、互に筒先を向け合ひて狙ひ打せしも、距離の遠きため命中せず、二発三発と争ふ内、勇兵鶴瀬の文三郎、仝初鹿野文蔵、芝田の前に立塞り、殊勝にも身を賭して防いだが、両人共木村の筒先に一命を落した。

敵味方ともに甲州気質の義勇を称賛せざるはなかつた。

其他日野兵の井上松五郎も、伏見の役に弟源三郎を打たれたる復讐の一念にて奮戦、衆に先し其働きは頗る目覚しかつた。

此時官軍は山下の葡萄棚に兵を伏せ、時分を計りて一時に打ち出て、双方混戦乱戦の白兵戦は随分激烈に行はれた。これに押立てられて芝田と木村の筒先の一騎打ちも遂に勝負決せず幕となり、芝田は頭を打抜かれ木村は腹に負傷して共に柏尾山下に華しき戦死を遂げたり。

此時官軍は木村伊助（介）の死体を戸板に載せ、上勝沼の常行寺に葬らんとせしに、住僧之を拒みしを以て持して下勝沼の護念寺に葬れり、石塔今仝寺にあり。

戦はいつ果つべしとも見えざるに、勇は最後の決心をなし、勝を一気に決せんと勢を集めて一団となし、自ら先頭に立ちて因州勢の軍中に喊を挙けて突入を試みた。

勇が最後の死戦を試みんとして簇がる因州勢の中に打て入りたる残兵は生粋の新選隊勇士にして、元治の変、鳥羽伏見の戦争以来、場数踏みたる武功の面々なれば真に一騎当千の隊士として奮戦した。勇の馬丁忠助といふは、赤裸々の侭主の馬前に立ち、東西に疾駆奔馳して馬と行動を共にしたるは軍中の奇観であつた。

勇が捕縛刑死の後は土方歳三の馬丁となり、五稜郭まで随従し二代の主に仕へて忠勤を励んだ。

其他勇の左右には、川崎順造を初め、十二人の小姓出の青年なから其武勇当るへからす、今日を限りの覚悟にて始終勇の側を離れず勇戦した。小勢ながらも此決死の奮戦は勝誇りし因州勢を俄に崩れ立ちて後へ〳〵と引き退くと、勇は何処までもと追撃し、あはや官軍は総敗軍と見えた。官軍は朝来の苦戦に万一の為メ、甲府城の総大将板垣退助の許へ加勢を送るよう使者を送つた。退助は嚇怒して曰く、敵は三百にも足らぬ小勢ではないか、我兵敵に数倍しなから苦戦に陥るとは心外なり。先陣の将は討死せよ、若敗れたるに於ては、甲府へ入るか迄もなく我手に於て討取るべしと罵りたが、さて其侭にても置かれぬので更に一分隊を応援として繰出した。

其応援隊は山中に踏迷ふて居た谷神兵衛の隊と出会して一となり、熊路樵路を辿りつゝ、漸くにして午後一時頃東陣川の山上に出た。

瞰下すと直く眼下は戦場で、今や味方が勇の手兵に打悩まされ散々になつて敗走せんとする処である。猶豫はならずと、谷神兵衛は深沢山より一気に押下ると、図らずも敵の本陣の後に出た。此時本陣は全く空虚にして、そこに居たのは傷病者のみであつた。これ幸と谷神兵衛は号令を下して、本陣目懸けて一気射撃を行はしめたが、急を衝かれて狼狽する所を無二無三に斬り込んで一瞬にして本陣を占領してしまつた。

其機を外さず、神兵衛は息をも継かず山を下り近藤勇の後より筒口を揃へて打出した。これに力を得て因州勢も返へし戦ふ。勇は腹脊挟撃に遭つたので、遂に絶体絶命の窮地に陥り、愈々戦死の外ないと覚悟を定めた。勇は敵の包囲に陥て、愈々戦死の外ないと覚悟した時、脱藩の士佐々木一は血路を開て此場を落延ひ、後は自ら敵中に躍り込み、四角八面に切り靡けて僅に一方の血路を開いた。勇等は其口より鶴瀬、駒飼の方面に落ちたが、その間に在つても大砲方のシャビを外し、クサビを谷底に投込みて、分捕されても役に立たゝぬやうにして棄て去つたは大出来であつた。

柏尾の戦争四方に聞ゆるや、地方より見物に出懸るもの蟻の甘きに集る如く、当時一宮には蜂城塾、蜂谷塾の二学舎あり。此処に学べる数百の学生雲霞の如く飛出し、岩崎山に登て見物せるを、新選隊のもの望み見て甲州人は気象荒し、是れ機山信玄の血液の然らしむ処と歓賞せりと云ふ。

此日近藤勇の扮装は、鎖帷子に向鉢巻、二尺八寸宗貞の銘刀を振廻はした。然し伏見で受けたる強創全く癒へざるを以て、左手に刀を振ったので活溌な働も出来ず、その不便を歯痒かつたそふだ。さて重囲を脱した勇は、急使を走らして春日隊の佐藤彦五郎を招き寄せ、一団となつて駒飼宿の御座石の要害に拠り、残兵僅に十余人を以て官軍を喰止め、味方の笹子を越ゆる迄に支へようとした。追撃した官軍も敵が此死力を出しての防戦に、強硬に撃破する事も得成さず、遠くから小銃を打ちかけるに過ぎなかつた。こふして時を費やして日昏になつた。勇はもふ味方も充分笹子を越えた時分と察し、姿を陰すには便よき夕暮に紛れて陣を脱し、山道深く分入つた。其時会津浪人の大崎荘介といふが、勇に向つて云ふには、「拙者一人殿をして踏み止まり、敢て後の為に官軍を支へ申さん、若し力及はずば討死致す迄の事、若しそれにても追撃急ならば、道の切所々々に薪を積重ねそれに火を掛けつゝ落ちられよ、山中の一筋道火の消ゆる迄は敵も前進致すまじ」と決心固く勇に乞ふた。勇は其義勇に感じ、死を惜みて切に留めたるも、肯かざる大崎の義気に感じ涙を呑んで其志に任した。

勇等が落ちて間もなく、官軍は押寄せ来り、勇等の本陣とせる駒飼宿の浜田七左衛門を捕縛しこれを先導として笹子峠に向ふた。大崎荘介は時分は好しと、積重ねた薪に火を附けて其烟の中より切て出で、手当り次第に切りまくつた。官軍も此不意の出来事に、まさか敵一人とは思はず、多勢の伏兵なる事と思ひ隊を退けて小銃を浴せ掛けた。大崎は其弾丸の間を潜りて山中に逃け入り、山路を辿りて翌朝近在の代官の家に押入り、威嚇を用ゐて軍用金を取立て居る所を官軍に捕縛され、甲府に引立てられた。大崎の奮戦の為に官軍は狐疑を生じ、山中にも幾個所の伏兵あらんと察し、夜の内は危険であるとて、其侭追撃を中止して夜の明るを俟つた。勇等は為めに易々と落延びる事が出来た。

甲府

外で斯る戦争をして居る間に、甲府城内では勇に心を寄せて敵意を挾むものを検挙し、柴田監物、保々忠太郎、疋田喜一郎、樫田忠三郎、武島兵三郎、上田輔助、飯野禄三郎、小林丑五郎、松植藤九郎等を捕縛し、厳重なる吟味の末、柴田、疋田、保々の三人は極刑に処せられ、余のものは入牢となつた。彼の鎮撫隊退拠の殿をして捕はれた大崎荘介は、城内に引かれて取調を受けたが、飽まで反抗の語気を以て官軍を罵つたので、土州の剣客中屋修治は余りの雑言に腹を立て、白洲に於て一刀の下に斬首した。此処分の為めに甲府は静穏に治つた。板垣退助が発した軍令に甲州の意気を称揚し、朝廷に忠勤を尽すは信玄公の遺志を継ぎ、併せて武道に適へるものであると説いたので、非常に甲人の意気に投じ、武田浪人と呼ばるゝ士が各祖先伝来の甲冑背負ふて四方八方よ集り来り、敢て官軍に属して微力を致さんと願ひ出つる者多きに、これ等の郷士を以て一隊を編成し護国隊と名つけて専ら偵察の任務に就かしめ、大に戦果を得た。

鶴瀬駒飼宿の山中を散々になつて落延びた鎮撫隊を、近藤勇は漸くにして取纏め、黒野田村笹子川に陣取りて、更に追撃軍と一戦を試みようとしたが、其時隊士の心既に隊長勇を離れ戦意なきに、勇は詮方なく春日隊の佐藤彦五郎と内議して、八王子に引上げ後に再起を計ることを為さんと陣を払つて退却した。

定にて柏尾戦争は終を告げた。

是より近藤勇の始終の大略を記してまとめとす。

近藤勇は、武州調布町字石原の窪村に生れ、十七年の時剣客近藤周助の養子となり、始めて近藤姓を冒す。

甲州鎮撫に敗れたる勇は、官軍に捕縛せられ、厳重なる警衛を以て千住の本陣に送られ、参謀香川敬三の前に引出され取調を受けたが、敬三は其武勇を惜み、官軍に降伏するよう勧告せしが、応ぜざるを以て遂に之を板橋の刑場に送つた。

時は明治元年四月二十五日、刑場に引出されたが見届役人に申出て、髪月代を整させ、髯美しく剃らせ、且役人に向ひ恐縮でござるが料紙硯を借用致したしと申出て、役人は心得て差出す、矢立の筆を取りて懐紙に認めた辞世は左の二首である。

孤軍援絶作浮図、観念君恩涙受流、一片丹衷能殉節、雁陽千古是吾儔

靡他今日復何言、取義生吾所尊、快受電光三尺剣、只将一死報君恩、

認め終りて末期の水を飲み従容として死に就けり。時に歳三十五才なり長倉新八、原田左馬之助等は勇と絶縁して幕兵の脱走兵に加つて会津に落ちた。土方歳三、勇の捕はれたるを聞き、何れへか姿を隠したが、再ひ徳川の脱走兵を糺合して宇津宮を襲ひ、若松城に入りしが、同城の陥るに及んで函館に航し、榎本武揚等と共力してあくまで官軍に抗戦せしが、翌年五月十一日壮烈なる戦死を遂げた。

年三十五才なりし。

柏尾の戦

（旧幕府第三巻第七号より抜書）

結城礼一郎

其時分私は有無之助と申して居りました。甲州の生まれで御維新の騒ぎが始まる頃には江戸へ出て、大砲組の方へ這入つて長州征伐にも行きました。伏見の戦争へも出ました。近藤とは其の時から知り合つて居りましたが、まだ別に新撰組へ加盟したと云ふわけでもなく、只ワイ〳〵で帰つて来ますと丁度慶応四年の二月です。甲陽鎮撫隊と云ふものが出来て、近藤が手のものを連れて出掛ける事になりました。其処で誰か甲州の地理に詳しいものを欲しいと云ふて探してる中、私なら大砲の方も少しはやる……新撰組には此時大砲の打ち方を知つてるものがなかつたので……、満更知らぬ仲でもないからと云ふので隊のものをよこして色々話がありました。私も腕がムズ〳〵して居る時分ですから宜しいと云つて御取り人になつて参りましたが、役目は地理嚮導兼大砲差図役と云ふのでした。だが久し振りで国へ帰るのではあり、是れでは貫録が足りないと思ひましたから、其後近藤に話して軍監と云ふ名をも貰いました。組員は皆小十人格で青だゝき裏金輪抜けの陣笠を被り、近藤は若年寄格、土方は確か寄合席と思ひました。一切永井と申す若年寄の計らひで、勝さんなどは反対のやうでしたが別に御止めもなさりませんでした。

同勢は能くは覚えてませんが、二百人計りと思ひました。何んでも非常に少なかつたのです。それ故、もと神奈川に居りました菜葉隊……、御存知ですか格は低う御座んしたが、当時無役で大層強いと云ふ評判のあつたものです。

其菜葉隊二大隊が後詰をする事になり、八王子の千人同心も二小隊程繰り出す筈になつて、二月の卅日（ママ）に愈々出発致しました。此の時ズツト甲府まで這入つて仕舞へば宜かつたのですが、近藤も土方も日野在の出生で、今度二人が大層エラクなつて其地を通行すると云ふので、親戚故旧が皆道へ出迎えて、あつちでも御祝ひ、此方でも御悦びと、酒ばかり飲んで居たものですから、其晩は府中泊り、明くる日は四里行つて八王子泊りで、三日目に漸く甲州へ這入つて郡内の与瀬と云ふ所へ陣を取りました。与瀬で私は近藤と相談して、モウ何んだか官軍も甲州路へ向つて来たようだ。誰れか一人間者を入れて兎も角も様子を探らせませうと申して、丁度伊豆の大監の博徒の乾児で熊五郎と云ふ者が其の近辺に居りましたから、此奴に旨をふくめて其の夜の中に入り込ませました。そうしますと、夜になつて代官が江戸へ早馬だと云ふて陣の前へ来たものがありましたから、早速呼び寄せて近藤と一所に何様（どう）云ふ早馬かと尋ねますと、官軍が昨夜信州の下の諏訪まで来たと云ふ事です。それはかなはん何様しやうか、下の諏訪から甲府まで十三里、与瀬から甲府までは十七里、而かも其間には笹子と云ふ峠がある、是は今夜の中打立なければならぬと申しましたが、近藤の云ふには、今は皆疲れて居てそれに大砲は小荷駄にしてまだズツト後にあるから、行つても迚も駄目だらうと云ふので仕方なしに少し休んで七つ立ちと号令を下しました。

然るに明けて見ますと、満地の雪が降つて甲州街道は迚も人馬の通行が出来ません。それで其の夜は先鋒が猿橋、後が犬目へ泊る事になりましたそれが三日の夜の事でした。

四日には雪消で道はヒドウ御座りました。マア何様か此様か笹子を越して、直き麓の駒飼と云ふ所へ陣を取りました。所が着くと直ぐ官軍只今甲府へ這入りましたと云ふ報知で、シマツタとは思いましたが仕方がありません。駒飼に泊る事として、徹夜して軍評議をして私は今すぐに打立ちて甲府までは六里ですから、裏手を廻り西口に火を掛けたなら官軍はキツト市中に散宿して居る事故驚いて狼狽する、それを見たら甲府勤番も何様かするだらうと策を立てましたが、昼峠を越して夜又六里の夜討は兵を損するばかりで功は無からうと云ふ説で中止になりました。そして此の隊では迚も人数が足りないから、兎も角も此の険によつて菜葉隊を待ち合せる事に定免ました。定まつてからはモウ仕方がありません。私は一人で手の者をつれて駒飼から一里程下つた柏尾へ胸壁を築て、夜中掛つて四斤砲を二門据へつけました。

御承知の通り甲州は四方は山又山の険阻ですが、中へ這入ればズツト平らで、十里四方に目を遮るものは何にもありません。柏尾は丁度其の平地からダン〳〵上り上つて来て、愈山へかゝらうとする所で、清盛が造営したと云ふ薬師があり、直き下を日川が流れて居ります。

是れは一名三日川と申して、柏尾の奥の天目山から流れ出すので、急ではありませんが随分険呑な川です。胸壁を築きましたのは其の川が山へブツツかつてクルリと廻つて平地へ流れ出す処ですから、ホントに断崖絶壁で要害は頗る堅固でした。それで大砲は一門西へ向けて本街道から来る敵を打ち、一門は南へ向けて川向ふの方から来る敵を打やうにして置きました。万事仕度が出来ましたから、私は十五人預つて敵情視察のため、勝沼へ参り宿の外れへ関門を建てました。それが五日の晩ですが、其の時甲府勤番から組頭の子息で柴田小太郎と申す者が参りまして、軍監に御目にかゝりたいと云ふのです。多分勤番が内応する手筈を定めに来たのだと思ひましたが、私は農兵募集と云ふ大役を背負て居りましたから、後から来た会津の大崎宗助と云ふ男に応接を任せて、十五人の組の者をも預けて諸処飛歩いて、其夜は岩崎山から勝沼一面に篝をたかせました、そして六日には農兵を募るために勝沼在の小佐手と申す村へ参り、村々へ触れを出して、即刻名主一同粟生野の松泉寺へ集るやうに申して集つた処で、今回甲陽鎮撫隊の御趣意を説て聞かせ、徳川家のために応分の力を尽くすやうに銘々の判を取り、其の夜は先づ近処の山々で篝を焚かせる事にしました。

皆悦んで承諾しましたので、私は一応本陣へ帰つて近藤と打合せをし、改めて黒駒辺の博徒を駆り集めやうとして牛奥まで参りました処、既に柏尾に戦争があつて、五つ頃から初まり一時ばかり戦つて、東軍は山を越して逃げたと云ふ噂が頻りです。中には勝沼の宿で結城さんが殺されたなんて云つているものもありますから、此いつはウツカリ帰れぬと思つて暫時考へて居ますと、今の雨敬の兄で雨宮総右衛門と云ふ牛奥の名主が飛んで来て、此んな処に入らつしやつては大変です、実は斯く〳〵ですと戦の様子を話して呉れて、サア此れから天目山を越して御逃げなさいと申しましたが、懐には先程名主連から請取つた請書が這入つて居ます。若し逃げ損なつて捕まりでもして、此の請書から名主連が迷惑するやうな事があつてはならぬと思ひましたから、一里ほど離れては居つたが松泉寺へ取て返し

て又栗原まで逃げて参りましたけれども、街道は官軍の往来か繁しくて路一つ横る隙がありませんので、仕方なしに穴ある御宮の内陣へ這入て夜の更けるを待つて居ます中、昨日からの疲れで寝て仕ひました、起きて見ると夜はまだ明けず籌も焚きすてられて人通りもチラリホラリでしたから、急いで宿を通り抜けて狐新居の知る辺へ落着で隠れました。

聞けば官軍は因州土州に諏訪と松代が這入つて、人数も五千人近くあり、本街道と日川の側と二手に別れて押寄せたのだそうです。それで勝沼の関門は何の造作もなく破られて、大崎宗助は擒になり、組の者は柏尾まで引上げましたのが、何にせよ大砲の打方を知らないので、二門あつても少しも役に立たなかつたそうです。私は前の日粟生野へ参ります前に、ヨモヤ官軍がそう早く来やうとは思ひませんでしたから、大砲の事なども詳しくは申残さず、只若し敵が見えたら散弾を打て、此処では榴弾を打つてはならぬと申して置きましたのに、打つ者が散弾と榴弾の区別を知らず、殊に口火を切らずに打ちましたから、弾は皆前の岩崎山へスボリ〳〵と打ち込んで少しも破裂も何も仕なかつたのです。それですから官軍もはじめは大砲のあるのを見て無碍には進みませんでしたが、役に立たぬと云ふ事が解つたのでドン、ドン小銃の達せぬ川向ふの道を通つて日川を溯つて後を切らうとしたそうです。私共の方でも此処で後を切られては大変だと思つて少し狼狽して居りますと、本街道をやつて来た兵は橋の処で二手に別れて、一手はズン〳〵深沢入りの方へ這入つて後の山へ上らうとしました、此方は人数が少ないのでそう〳〵勢を分ける事は出来ませず、死物狂で戦ひましたが、一発打てば幾らやると云ふ約束で雇つた百姓共がをぢ気が立つて崩れ出したので、流石の新撰組も何様もする事が出来ませず、大急きで駒飼まで引上げ追れてトウ〳〵笹子を越したのだそうです。それでも戦争は決して見苦しい戦争ではなく、引くに隊を乱さず奇麗に引いたので、官軍も長追もせずに引返したと云ふ事です、此の時東の方で死んだのは二三人でした。官軍の方には随分沢山あつて因州の隊長などもやられました。若し最初近藤が日野でグズ〳〵して居らなかつたならば若し柏尾で大砲の打方さへ知つて居たならば、地の理は善し、人の和は得て居る、必ず目ざましいことがあつたでしようが是れが天理で何様も仕方がなかつたです。

私は狐新居へ一日隠れて、そろ〳〵探索が厳しくなりましたから、服装を更へて市川へ参り富士川を下つて駿河へ逃げました。道で先に勝沼まで内応にやつて来た柴田の家族が縛られて通るのに行逢ひ、又官軍が戦争ありと聞いて続々入り込んで来るのに逢ひましたが、幸ひに咎められずに落延びました。

御話し申せばこれだけの事です。其の後私は駿河の大宮在へ隠れて居つて、其中を近藤は板橋で斬られる、新撰組はバラ〳〵になつて仕舞ふと云ふ有様でしたから詳しい事は存じません。

第三編　村鑑明細帳